

第241回

「元気に百歳」クラブ・俳句サロン「道草」(令7年4月) 句会記録

未明にはすでに降っていた雨は、朝方になっても激しくなるばかり。今日は予報が狂って終日雨になるのかと思っていましたら、8時頃にはうっすらと太陽が雲の間に見えるようになり、9時過ぎには青空に変ってきました。気象情報は快方に向かい良好です。

句会のあった11日も、雨の予報でしたが、結局雨は降らず、この一週間、雷雨、竜巻が予想されるという天候の移り変わりが激しいものでした。

4月の句会ですが、都合の悪いメンバーが多く、下述にありますように、句会への参加者は5名になりましたが、その分、意見が活発に飛び交う充実したものになりました。投句に参加された方、句会に出席された方を申し上げます。

4月の投句に参加された方(15名)

芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、金田月草さん、木村栄女さん、高瀬荻女さん、辻 柴楽さん、手嶋錦流さん、原 晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白然。

(なお、木村栄女さんは、選句には参加されませんでした。)

句会に参加された方々(5名)

一光さん、和感さん、荻女さん、傘吉さん、白然。

本日の優秀句並びに獲得票数

4月の優秀句、その中から天賞に推挙された句、最多得票賞(☆印)の句は、下述の通りです。

◎『球春や国歌独唱背すじ伸ぶ』	晶如	天3㊦3
◎『村外れ地蔵似合ひの里桜』	傘吉	天2㊦4
◎『丹田に拳を置いて春の風邪』	晶如	天2㊦4
◎『すり鉢に葉脈残し蓬餅』	多佳	天1☆7
◎『笑み溢れ人豊かなる花見かな』	清助	天1㊦3
◎『バス停の美女もあくびの春うらら』	多佳	天1㊦3
◎『長州の一筋の橋駆ける春』	栄女	天1㊦2
◎『愉しみは画面と道連れ花見旅』	歌多音	天1㊦1
◎『姥捨の遠くて近き山おぼろ』	晶如	天1㊦1
◎『疎開さき菜の花亡母と眺めし日』	月草	天1㊦1
◎『花吹雪色とりどりのランドセル』	歌多音	☆6
◎『一日に十色の天気春の空』	和感	☆6

最多天賞獲得句は、天賞3票の晶如さんの句「球春や国歌独唱背すじ伸ぶ」が、獲得しました。甲子園での選抜高校野球大会の国歌独唱は、句では下五に「背すじ伸ぶ」とありますが、テレビを観ていた視聴者には、鳥肌の立つ感動がありました。

今年は全日本学生音楽コンクール声楽部門1位の大分県立芸術緑丘高校の鈴木心毬(みまり)さんが見事に歌い切りました。テレビでこの入場式を観て、この句を読まれた方々は、再びこのシーンを思い起こされ、一票を投じられたでしょう。

次に、天賞獲得票数は1票でしたが、最多得票数7票を獲得した多佳さんの句「すり鉢に葉脈残し蓬餅」が、最多得票賞(☆印)を獲得しました。中七の「葉脈残し」が、蓬餅をこしらえた人には、この実感を思い起こさせました。多佳さんは3月句会でも「薄紙にくるむひとりの雛納め」を詠み、最多得票賞(☆印賞)を獲得されています。2か月連続の最多得票賞(☆印)は、拍手喝采です。(いいね!)

次に、天賞はつきませんでした。歌多音さんの句「花吹雪色とりどりのランドセル」と、和感さんの句「一日に十色の天気春の空」が、それぞれ6票を獲得し、多数得票賞（☆印）に輝きました。最近の子供さんは、入学式でなくても新しいランドセルを背負い、桜の下で記念写真を撮っている場面に出会います。輝かしい写真が印象に残りました。次に和感さんの句もフレッシュなもので、下五の移り変わりの激しい「春の空」も、ダイナミックでしたね。6票を獲得しました。

白然記

俳句上達のヒント

月間俳句雑誌『俳壇』（4月号）102頁、長谷川權エッセー『二度目の俳句入門』からの抜粋（このエッセーは、今回が4度目で、本日は下述しておきました。

- 俳句の落とし穴・・・「わからない俳句」「説明的な俳句」「発想に問題のある俳句」。
- このうち、「わからない俳句」と「説明的な俳句」は、推敲次第で好い句に生まれ変わる可能性を秘めている。
- もう一つの「発想に問題のある俳句」は、最大の落とし穴で、俳句の原点である発想に問題があるのだから、いくら推敲しても好い句にはならない・・・捨てる。
- 俳句の発想の問題とは何か。

「ただごと俳句」 「焼き直し俳句」 「浅い俳句」

三つの実例其の一・・・「ただごと俳句」

- ・ 山の道やがて落ち葉に埋もれん
- ・ 一月の真っ青な空わが東京
- ・ 海山のいのちいただく雑煮かな

（五七五の俳句の形はしているが中身は空っぽ・・・ただごと俳句）

三つの実例其の二・・・「焼き直し俳句」

- ・ 早々と上がって寂し絵双六
- ・ 屋根の雪みしりみしりと眠られず
- ・ 寒菊のひかり纏ふも淋しけれ

（何処かで読んだことがある句、何かで見たことがある句・・・既視感）

既視感の根底・・・すでにあるものに寄りかかりたいという安心感。

長谷川權さんのエッセーの原文

・・・ところがこの淡い既視感「前にもこんな句があります」という赤信号ではなく、逆に「みんなが使った題材ですから安心です」という青信号を出してしまうのだ。・・・原因は同じ発想の俳句や文学作品がすでにあることを知らないからだ。かりに知っていても、あつていい、あるほうがいいと思ってしまうのだ。

過去の俳句を知らなければ暗中模索、一步も前へ進めない。俳句はそういう文学である。その怖さをしらず俳句を作り続ける人を「無知の蛮勇」というのだ。

三つの例の其の三・・・浅い俳句

- ・ まづまづと新婚さんへ屠蘇の盃
- ・ 戴きてリュックに差して破魔矢かな
- ・ ガザの子に生きる道あれクリスマス

（表面だけをなぞる浅い俳句、自分の句の浅さに自分で気づいて目覚めるまで浅い俳句を詠み続ける）

(人の心の思いは、言葉の意味と風味が豊かに調和し合って、初めて相手に伝わる。「浅い俳句」は、意味は伝えるが、風味が抜け落ちる。

以上